

土台を据える 悔い改めから信仰へ

テトス 2:11-14 を読みましょう。

「というのは、すべての人を救う神の恵みが現れ、私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあつて、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現れを待ち望むようにと教えさとしたからです。キリストが私たちのためにご自身をささげられたのは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心なご自分の民を、ご自分のためにきよめるためでした。」

神がなぜ、悪を放置し、不正と苦しみを歴史の中から取り除くのにこんなにも長くかかるのかと、不思議に思っているのなら、神はご自身のために人々を得ようとされている、というのがその答えです。それこそが、今の時代における神の究極の目的です。

土台を据えるというテーマの3つ目のセッション、「悔い改めから信仰へ」というタイトルのメッセージに入っていきます。最初に言っておきたいことは、悔い改めを通してでなければ、信仰への道はないということです。他の方法で信仰へたどり着くことができるという道はすべて欺きです。悔い改めのない本物の信仰は不可能です。

では、これまでに学んできたことを思い出すために、簡単に復習しましょう。まず、クリスチャン信仰の個人的土台は、イエス・キリストです。真のクリスチャンになるためには、その土台の上にその人の人生を築かなければなりません。ペテロが「あなたは、生ける神の御子キリストです。」と宣言した、イエスとペテロの対面は、特定の 방법으로私たちひとり一人の人生に起こる必要のある模範です。その対面には4つの要素があると言いました。

一つ目は、**対面**です。イエスとペテロは顔と顔を合わせて立っていました。二人の間に仲介者はなく、祭司もおらず、第三者はいませんでした。

二つ目は、イエスの永遠のご性質の聖霊による**啓示**がありました。大工の息子ではなく、生ける神の御子というご性質です。

三つ目に、ペテロはその啓示を受け取り、**認め**ました。それを拒絶せず、悟ったのです。

そして四つ目に、ペテロはその信仰を**公け**に告白しました。

それらの要素は、実際に成功するすべてのクリスチャン人生の基礎とならなければならない要素であると、私は信じます。対面、啓示、認めること、告白です。

また、とても重要で具体的な質問、それは、この土台を据えたあと、どのようにしてその土台の上に築いていけばよいのかです。イエスが語られた、賢い人と愚かな人のたとえから、この土台の上に建てることを見てきました。最初に、聖書を書かれた神のことは、そして生けることばとしてのイエスを認め、イエスの言われることを聞いて行なうことにあります。ですから、土台の上に建てることは、イエスの言われることを聞いて行なうことです。

また、私たちは神のことばの権威と力を見てきました。私は、それを記した著者から来ることばの権威を指摘しました。ですから、すべての書物の権威は著者にあるのです。聖書の権威は著者にあり、その著者とは、聖霊、つまり神ご自身の霊です。つまり、神の権威は聖書の中にあります。

また私は、みことばに2つのかたちがあると言いました、書かれたことばと個人的なことばです。イエスは神のことばが肉となったものです。そして私は、このことを、聖書とあなたの個人的な関係と結び付けました。もう一度言いますが、あなたは神のことばを愛する以上に神を愛してはいません。あなたがみことばに従う以上に神に従ってはいません。もし、あなたの人生のどこに神がおられるのかを知りたいなら、聖書をどこに置いているかを知ってください。なぜなら、聖書と神は同じだからです。書かれたみことばを通して、個人的なみことばが私たちの人生に入ってきます。

では、今日の教理的土台に入っていきます。私たちは、イエス・キリストが個人的土台であることを見てきました。しかし、新約聖書もまた、教理的土台があることを啓示しています。これは、何百万人というクリスチャンが気づかないでいますが、ヘブル 6:1-3 節で明確にされている啓示です。では、そのヘブル 6 章 1-3 節を開いてみましょう。

「ですから、私たちは、キリストについての初歩の教えをあとにして、成熟を目ざして進もうではありませんか。死んだ行いからの回心、神に対する信仰、きよめの洗いについての教え、手を置く儀式、死者の復活、とこしえのさばきなど基礎的なことを再びやり直したりしないようにしましょう。神がお許しになるならば、私たちはそうすべきです。」

ここで、2つの考えを結合させなければなりません。まず、土台を据えることは不可欠です。もし、あなたが今までに土台を据えたことがないなら、建物を建てることはできません。しかし、いったん土台をしっかりと据えたなら、土台を据え続けるのではなく、建物を完成させていくようになります。それらは結びついた2つの考え方です。しかし、ヘブル 6:1 を見ると、基礎的なことと言っています。これは、クリスチャン信仰の教理的土台で、もう一度その6つの教理に目を通していきたいと思います。

- 一つ目、死んだ行いからの回心、
- 二つ目、神に対する信仰、
- 三つ目、きよめの洗いについての教え、
- 四つ目、手を置く儀式、
- 五つ目、死者の復活、
- そして六つ目、とこしえのさばき です。

そして、それに従うなら、クリスチャン信仰のまさしくその出発点から、究極的な成就である永遠へと私たちを運んでくれることをあなたは知るでしょう。クリスチャン信仰が、やがて終わるものではなく、この人生やこの世界で終わるものではないということを理解することは、とても重要です。信仰はこの世界を越えた、時間を越えた永遠へと私たちをいざないます。今日、あまりにも多くのクリスチャンが永遠というビジョンを持つことが困難である

ことに私は不安を覚えます。彼らは、すべてのことが遅れることなく起こるかのように行動し、また考えます。事実、パウロは、もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です、と言っています。もし、あなたが時間を越え、永遠へとあなたを運ぶビジョンを持っていないのなら、あなたの状況は哀れで、多くの失望に苦しむでしょう。なぜなら、時間は完成ではないからです。完成は、永遠の中でやって来るのです。

6つの教理は、私たちが悔い改めという出発点から、まさに復活とさばきへと運ぶのです。

では、最初の教理である、死んだ行いからの回心について話していきます。しかし、まずヘブル6章3節の一つのとても重要なことを取り上げましょう。こう書かれています。

「神がお許しになるならば、私たちはそうすべきです。」

私たちは、神がお許しになるならば、完成と成就を目指すのです。あなたは、「神がお許しにならないことがあるのですか。神は私たち全員にそれらを目指してほしいのではないのですか。」と質問するかもしれません。建てることについて、小さな簡単なたとえでお答えしましょう。今日ある文明的な世界の大都市は、ビル建築の計画を立て、役所などしかるべきところからの承認を得なければなりません。そして、その役所の人に来て建築の段階ごとにビルを検査します。最初に彼らが実際に検査するのは、基礎です。なぜなら、基礎が不安定であれば、ビルも不安定だからです。基礎が堅いものでなければ、建設を続けることは認められません。

そして神は、みなさんや私にもまったく同じように取り扱われます。神は言われます。「あなたの土台を検査します。わたしの要求に従って土台が据えられていないなら、継続する許可を与えることはできません。」正しく土台を据えていないと、このクリスチャン信仰の初歩の段階を永遠に続けることができるだけで、成熟にも、完成に近づくことも、成就に近づくことも決してできないのです。ですから、クリスチャン信仰の土台である、これら6つの教理を習得することが、どれほど重要であるかがおわかりでしょう。

では最初の、死んだ行いからの回心を見ていきましょう。まず質問ですが、死んだ行いとは何でしょう。ほとんどの現代翻訳では、「死に導く行ない、行為」となっています。それは正確ではないと思います。死んだ行いとは、神への信仰に基づいてなされない、あらゆる行いだとは私は考えます。信仰に寄らない行いはすべて死んだ行いです。私たちの行動にいのちをもたらす唯一の者は、信仰です。ですから、教会に忠実に通っていても、貧しい人に施しをしても、祈りをしても、それが信仰によるものでないなら、それらはすべて、死んだ行いです。私たちは、信仰によらないすべての行ないから立ち返らなければなりません。信仰だけが、私たちが信じていること、私たちが行なうことにいのちを与えるのです。

それは、あなたが罪深い人生を歩んできたという意味ではなく、信仰があなたの心の中に入らず、神のいのちをもたらされなかったため、神にあって生きてこなかっただけなのです。

では、悔い改めとは何かを理解することは重要です。悔い改めは感情ではありません。私は今までに何度も、

説教者たちが人々に感情的な表現の中へ導き、キリストにある信仰へと呼びかけるのを見てきました。そして非常に多くの場合、その感情が薄れていき、人々はもう何も残っていないと感じて、失望してしまうのです。ですから、聖書が定義する悔い改めとは、感情ではなく、決心であることを忘れないでください。感情から来る活力ではなく、思いから来る活力です。私たちが人々の思いに届き、人々の思いを変えることができるなら、永遠の回心を見ることができるでしょう。今日、教会内での、いわゆる回心の多くは、その人の思いが全く変えられていないため、永続的ではないのです。彼らは感情的な体験をし、興奮し、数週間、数か月、いや何年かは素晴らしいと感じるかもしれませんが、結局は彼らの思いに触れられることがないため、とどまるために必要なものを持っていないのです。

さて、聖書には、新約聖書に用いられているギリシャ語、旧約聖書に用いられているヘブル語の2つの主要な言語があることをご存知ですね。その2つの言語には、悔い改めの特別な単語があります。私たちはその2つの単語を一緒にしただけで、悔い改めの完全な意味を知ることができます。ギリシャ語の単語は、「あなたの思いを変える」と常に訳されており、あなたの考え方を変えるということです。ですから、まず、悔い改めとは、あなたがこれまでに生きてきた道についての思いを変えるということです。私は自分を喜ばせるため、自分のことをするために生きてきました、今からは私の救い主イエスを喜ばせるために生きます、ということです。お話したように、それは感情ではありません。あなたは、明白な感情なしに悔い改めることができますが、思いを変えることなく、悔い改めることはできません。

そして、ヘブル語では、ユダヤ人がとても現実的な人々なので、典型的にユダヤ的な単語です。彼らは実際にどうするのかを知りたいのです。ヘブル語の悔い改めに使われる単語は、文字通りでは「向きを変える」です。あなたがある方向に向かっており、それが神に背を向けた間違った道であるなら、180度向きを変えて神に向かって言うのです。「神、私はここにおります。何をすればよいのか教えてください、そのようにします。」

ですから、この2つの単語を合体させれば、悔い改めの完全なかたちが描けるのです。信仰は悔い改めのあとにしか来ません。聖書の全体的なメッセージは、悔い改めて、信じる。この順序です。多くの人々が信仰において葛藤しています。それは、信仰のために葛藤しているのではなく、悔い改めの条件に出会ったことがないということです。これが6つの基礎的教理の一つ目です。もし、あなたがその土台となる石を据えていなければ、あなたの建物は常に不安定です。

私はこれまでに個人的な問題を抱えている、多くの人々、多くのクリスチャンの相談にのってきました。その数多くの経験から、この結果にたどり着きました。少なくとも、クリスチャンだと公言する、あるいは真のクリスチャンの問題の50%は一つの事実が原因であって、それは彼らが一度も本当の悔い改めをしていないことです。彼らは思いが本当に変えられたことがありません。本物の決心をしたことがなく、イエスを主として自分の人生を本当に明け渡したことがないのです。決心について、いまだに、「私がこれをしたら、私のために何があるか。あれをしたら、何が受けられるか。」という視点から考えているのです。もし、あなたが悔い改めたなら、そのようには考えないでしょう。あなたは、「私がこれをするのはイエスの栄光を現わすことになるだろうか。もし、あれをしたら、そのことがイエスに栄光を帰することになるか。」と考えるのです。若い人々だけではなく、二心の方々に言います。聖書は、二心の方は、すべての道に安定を欠いているとあります。その人は確固とした土台がなく、

揺るがない建物を作り出すことができません。

ですから、今みなさんをお招きしたいと思います。少しの間静まって、自分自身に聞いてください。「私はこれまで、本当に悔い改めたことがあったらどうか。私は今もなお二心ではないだろうか。月曜日には私の目的はイエスを喜ばせることであり、火曜日の私の目的は自分自身を喜ばせることではないだろうか。」そうであるなら、あなたは両方の世界で実際、最悪の状態です。あなたは、自分自身のためだけの、この世の生き方をした方がいいのではないのでしょうか。なぜなら、あなたは二心の人であるからです。

さて、私たちは、悔い改めの性質に移らなければなりません。イエスが真の悔い改めの最も生き生きした完全な様子を表わしている一つのたとえ話があります。それは、放蕩息子のたとえ話です。ある人が、それは思いやりのある父のたとえと呼んだ方がいいと言いました。ほとんどのみなさんがご存知だと思います。ルカ 15 章です。裕福な家庭の弟息子は、父の財産の分け前を今すぐ手にして、遠い国に旅立っていくことを決め、そのようにしました。彼はあらゆる罪深いことをしました。そして、すべての財産を使い果たした時、飢饉が起こり、彼が得られた仕事は豚の餌やりだけでした。忘れないでいただきたいのは、豚の餌やりは養豚業の人を軽蔑する意味しているのではなく、彼がユダヤ人だったので、それは最低の仕事だったことです。私たちは養豚業者に対してどうこう言っているのではなく、単にユダヤの人々にとって、豚は外にいるのがふさわしいことだったのです。

ここで、彼はぼろぼろの服を着て豚に餌をやり、お腹もすいていて、豚が食べるいなご豆でお腹を満たしたいのです。そして次のことが起こりました。ルカ 15 章 17 節からです。

「しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。」

これこそが、あなたに訪れなければならない瞬間です。真理の時と呼ばれる、我に返ることです。あなたの現実を自分で知らなければなりません。神が見ておられるように自分を見なければなりません。

「しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。立って、父のところに行って、こう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。』」

この中に 2 つの要素が見えますか。このように続いているのです。

「こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。」

彼は決心し、向きを変えました。それが悔い改めです。決意し、その決意を実行に移すことです。自分が傷つけた父、自分を愛しておられる神のもとに行って、言うのです、「私は自分に人生を無茶苦茶にしてきました、自分の人生を生きることはできません。あなたが必要です。私を迎えてくださいますか。」素晴らしいことは、彼が「雇い人のひとりにしてください。」と父に言おうとしていたときに、父は彼を見ていたのです。これはとても美しい

姿だと思います。まさに、神を表わしています。私たちが立ち返り始めるとき、神は私たちを見て、待っていてくださるのです。

「ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き…」

まさに神の姿です。そのように神は私たちに会ってくださいます。

「口づけした。」

そし父は息子に「雇い人のひとりにしてください。」という最後のことばを言わせませんでした。父が言ったことは、

「急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。」

これが真の悔い改めの結果です。このように神に迎えられる価値ある悔い改めです。あなた自身について少し考えてみてください。彼は我に返り、「自分の人生をめちゃくちゃにしまった。お父さんがくれたすべてのものを浪費してしまった。でも、決心し、向き直って、お父さんの元へ帰って謝ろう。」と言って向き直って行きました。そのことについて考えてみてください。それが本当の悔い改めです。悔い改めには行動が伴います。

後悔という、正しくない悔い改めもありえます。ユダはそれを経験しました。マタイ 27 章 3 節以降に書かれています。

「そのとき、イエスを売ったユダは、イエスが罪に定められたのを知って後悔し、銀貨三十枚を、祭司長、長老たちに返して、『私は罪を犯した。罪のない人の血を売ったりして』と言った。しかし、彼らは、『私たちの知ったことか。自分で始末することだ』と言った。それで、彼は銀貨を神殿に投げ込んで立ち去った。そして、外に出て行って、首をつった。」

ユダは後悔しましたが、変わることはありませんでした。事実、彼は変われるチャンスを逃したのだと思います。私にとってこれは重大な問題です。人々は生きている間に、変われるチャンスを逃してしまうことがあります。すべての人の人生の最も重要な瞬間というのは、神があなたを悔い改めについて取り扱い始めるときだと、私は考えます。あなたが、「どうでもいいや。」と鼻であしらうなら、のちに神が再びあなたを取り扱ってくださるという保証はありません。すべての人の人生の最も重要な瞬間は、神が、「悔い改めなさい。私はあなたを取り戻したい。あなたを愛している。あなたを必要としている。」と言われる時です。

私がこれまでに見てきた人々の人生と、聖書に書かれていることを思い巡らしていました。そして、神を本当に怒らせる一つのことは、神の恵みを軽んじることです。神はご自身の恵みを無条件に提示しておられますが、もし、私たちがそれを軽く見るなら、神は怒りに転じます。神の恵みを軽んじた一人の人がいます。それは、エサウです。ヘブル 12 章を少し見ていきたいと思います。私たちの中に、エサウのような人が多くいるからです。私

たちはエサウのような決断をしないように注意したいと思います。ヘブル 12:14 からです。

「すべての人との平和を追い求め、また、聖められることを追い求めなさい。聖くなければ、だれも主を見ることができません。」

聖くなければ、だれも主を見ることはできないと言っています。

「そのためには、あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がないように、また、苦い根が芽を出して悩んだり、これによって多くの人汚されたりすることのないように、また、不品行の者や、一杯の食物と引き替えに自分のものであった長子の権利を売ったエサウのような俗悪な者がないようにしなさい。」

ここでは、エサウが偶像礼拝の罪に関与していたかどうかという記述はありませんが、彼の態度は神の目には偶像礼拝と同じくらい悪いことでした。どのような態度だったのでしょうか。たった一杯のスープのために自分の長子の権利を見下したのです。彼は長男として長子の権利があり、すべての遺産を得るはずでした。ただお腹がすいていて、ヤコブが調理していたおいしそうなスープのにおいを嗅いでという理由だけでした。私はアラブ人の中で生活していたことがあり、時々彼らはヤコブが調理していたのとまったく同じレンズ豆のスープを作っていたので、私にはよくその気持ちがわかります。アラブ語で「スラビット・アディス」と呼ばれています。それは、本当にいいにおいで、部屋中に充満するのです。私は、エサウが獵から疲れてお腹がすいて帰ってきて、このおいしそうなにおいをかいたときのことが目に浮かびます。そしてヤコブが言いました。「今すぐ、あなたの長子の権利を私に売りなさい。そしたらこのスープをあげましょう。」おそらく、エサウは、飢え死にしそうな今、自分にとって長子の権利には何の意味があるだろうかと考えたのではないのでしょうか。今、目の前に差し出されているものを手に入れよう。そして、エサウは長子の権利を軽蔑し、神の究極の怒りをかうことになったのです。後に預言者マラキを通して神は言われています。「わたしはヤコブを愛した。わたしはエサウを憎み…」厳粛な考えです。もしあなたが、故意に神の恵みと神が提供するイエス・キリストの相続を軽んじ、安っぽいもの、この世の一時的な楽しみのために、神に顔をそむけるなら、神の非常な怒りをかうでしょう。

この話の続きを見てみましょう。

「あなたがたが知っているとおりに、彼は後になって祝福を相続したいと思ったが、退けられました。涙を流して求めても、彼には心を変えてもらう余地がありませんでした。」

ギリシャ語では明確です、彼は悔い改めを求めず、祝福を求めたとあります。彼には心を変えてもらう余地も方法もなかったのです。そして私は、この人生において、悔い改めの機会を通り過ぎてしまった人は、二度とそれを取り戻すことができないことがあり得ると思います。私はみなさんに強く勧めたいのです。これはとてもとても重要なことです。多くの教会や教派で悔い改めの必要について、あまりにも語られていません。しかし、真の悔い改めなくしては、真の信仰はあり得ません。悔い改めという最初の土台が据えられていないので、常に日々浮き沈みがあり、不安定になります。自分を喜ばせ、自分のためにするところから立ち返り、神に向かい、「神さま、ここに私はおります。何をすればよいのか教えてください。そうすれば、私はそれを行ないま

す。」これが悔い改めです。

これを聞いておられる方の中にも、今までに本当の悔い改めをしたことのない人もいるかもしれません。それがあなたの問題の多くの根源となっているのではないかと思います。あなたの浮き沈みする体験です。いい日だと感じる日もあり、教会での素晴らしい集会、その日はハッピーに感じます。翌朝何かが起こり、落ち込みます。あなたが最初の土台の石を据えたことがないからです。あなたが持っているものは、すべていつか崩れてしまう不安定な建物です。

私は、悔い改めが信仰の前に来なければならないことを強調したいのです。悔い改めのない真の信仰はありません。このことは、新約聖書で一貫して強調されています。マタイ3章で来たるべきメシヤ、イエスのために道を備えるために遣わされたバプテスマのヨハネの奉仕について書いてあります。そのメッセージは一言で言うと、どんなものでしたか。悔い改めなさい、です。言い換えれば、悔い改めはメシヤが来る前に不可欠なものだったのです。悔い改めはメシヤが来られる道を備えました。神の民であるイスラエルが、その悔い改めという経験を通るまでは、彼らはメシヤに出会うために整えられることができなかったのです。マタイ 3:1-3 で言われています。

「そのころ、バプテスマのヨハネが現れ、ユダヤの荒野で教えを宣べて、言った。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」この人は預言者イザヤによって、「荒野で叫ぶ者の声とする。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ』』とされたその人である。」

彼はどのように主の道を備えましたか。神の民を悔い改めて立ち返るように叫ぶことによってです。そして、悔い改めは、私たちの心と人生の中に主が来られるために私たちが備えることができる唯一の道です。

それから、イエスご自身のための働きを終えたとき、ヨハネの預言的ことばの成就において、福音の働きを続けました。

「ヨハネが捕らえられて後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べて言われた。『時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。』」

悔い改めて、信じる。まず悔い改めなければ、あなたは本当に信じることができません。イエスの唇から来る最初の命令は、信じなさいではなく、悔い改めなさい、です。

東南アジアの集会で、ある説教者がいやしのメッセージをしていました。神のみこころといやしの計画について非常に表現力豊かに語り、癒しについての約束のいくつかを引用していました。しかし、彼は悔い改めについて一言も語りませんでした。それから、彼は人々を前方に招きましたが、その人たちのほとんどが偶像礼拝の背景から来ており、神が差し出しておられるものをどのように受け取るのか全く分かっていません。私は、人々のカウンセリングに関わっていたので、そのことがわかっていました。それは私にとっても大きく学ぶところでした。その説教者の素晴らしい概念と優しいことばは、それらの人々を完全に混乱させました、なぜなら、彼は悔い改めな

しに神の元へ来ることができるという印象を人々に与えたからです。彼はメッセージの中でただの一度も、悔い改めという言葉を使いませんでした。私は説教者を批判しているのではなく、これは私が学んだことでもあり、あまりにも多くの福音的教会や福音的礼拝で、あまりにも多くの人々が、神がしてくださることしか聞いたことがなく、神があなたに求められることを聞いたことがないために、混乱してしまっていると言っているのです。神が、まずあなたに求められることは悔い改めです。あなたの思いを変え、180度向きを変えて、神に向かって、「神さま、何をすべきか教えてください。そのようにいたします。」というのです。それが悔い改めです。

イエスの最後のミニストリーを見てみると、そのメッセージは決して変化していません。ルカ24章でイエスは復活の後、弟子たちに指示を与えました。46-47節です。これは復活のあとでイエスが天に昇られる前であることを忘れないでください。

「こう言われた。『次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。』」

メッセージは、悔い改めと罪の赦しです。しかし、悔い改めのない赦しはなく、そのメッセージこそ、エルサレムから始まり、あらゆる国々に宣べ伝えられるのです。悔い改め、そしてイエスの御名による赦しです。

そして、教会がペンテコステの日に公けに現わされることになった時、大いなる聖霊の注ぎがあり、ユダヤ人の群衆が何が起きているのかを知りたいと思い、ペテロは立ち上がり、使徒の働き2章にある有名なメッセージを語りました。そしてそのメッセージの最後に、彼らは心を刺されて、ペテロに「私たちはどうすればよいのか。」と尋ねました。これは罪人たちが教会に、自分たちはどうしたらいいのかと尋ねた最初の出来事です。これを読みましょう。使徒の働き2:37です。

「人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、『兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか』と言った。」

もし、あなたが心から神があなたに望んでおられることを知って、それを行ないたいと願うところまでたどり着いたなら、神はご自身の願いについて、いかなる疑いもあなたに抱かせないでしょう。神は、あなたが知りたい、行ないたいと思うところへ導いてくださいます。その人たちは罪を本当に自覚するやいなや、使徒たちに言いました。「兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか。」ペテロは、神と教会の代弁者として、彼らに明確に、正確に、具体的な答えを与えました。

「そこでペテロは彼らに答えた。『悔い改めなさい。』」

最初に何を言いましたか。そう、悔い改めです。

「そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうす

れば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」

三段階の約束があります。

一つ目、悔い改める。

二つ目、水のバプテスマを受ける。

そして、三つ目、聖霊を受ける。

私は、神のプログラムが変わってしまったとは思いません。このことこそ、神が今日も罪人たちに願っておられることだと信じます。また、このことこそ、教会が宣言すべきメッセージだと信じます。悔い改めて、水のバプテスマを受け、聖霊の賜物を受け取ることです。

そのメッセージが語られる場所では、ペンテコステの日に起こったことがまさに起こります。人々が悔い改め、バプテスマを受け、聖霊を受けるのです。私は、人々が聖霊に満たされて水のバプテスマから上がって来る、そのことを何度も見てきました。なぜ私たちはメッセージの質を落としてしまうのでしょうか。私たちにはその権威はありません。唯一、私たちにある権威は、悔い改める、水のバプテスマを受ける、聖霊を受ける、という新約聖書のメッセージを宣言することです。私たちがそのメッセージをする時、神が答えを与えてくださいます。神は変わることなく、メッセージも変わることがありませんが、多くの場合、教会が変わってしまったのです。

今から言うことは、あなたにとってショッキングかもしれませんが、使徒の働き記録の中で、水のバプテスマなしに、イエスの救いの宣言をした人を見いだすことはできません。どうか調べてみてください。なぜなら、イエスは、「信じてバプテスマを受ける者は救われます。」と言われました。「バプテスマを受ける」という言葉から私たちが引き出せる権利は何でしょうか。救いは、信じることとバプテスマを受けることです。あなたはそれを行なったら、聖霊を受ける候補者となります。それは教会のメッセージで、神に関する限り、それは決して変わることがありません。

そして、異邦人の偉大な使徒、パウロのミニストリーを見てみましょう。使徒の働きでそれを見ることができます。最初に、パウロは非常に知性的で偶像礼拝の町アテネで自分の召命を発見しました。パウロは、ついには、アテネの人々に説教しました。私は彼にはその意図はなかったと思いますが、彼らがパウロの信じているものを知りたいと願ったので、彼らに語ったのです。使徒の働き17章30節以降で、人々が常に偶像礼拝の生き方をし、神を無視していることについて語っている箇所、このように締めくくっています。

「神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。」

非常に明確に、神が今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられると言っています。例外となる場所、人はありません。神が地球規模で人類に求めておられることなのです。神は、もし私たちが悔い改めるなら、過去を見過ごしてくださいます。

続きです。

「なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの実証をすべての人にお与えになったのです。」

また、忘れられがちな、使徒たちの説教のもう一つの特徴である、イエスは救い主であるだけでなく、さばき主でもあることに気づいてください。イエスは救いと同様、さばきにおいても、完全で力があります。あなたがイエスと救い主として出会わないなら、さばき主として出会うでしょう。もう一度言いますが、これはほとんど説教から外されてしまうのです。人々は救い主について話しますが、さばき主については全く語らないのです。事実、アテネの人々へのメッセージでパウロは、救い主について語らず、すべてさばき主として語ったのです。

そして、私が言いたいことは、さばき主としてのイエスに直面するという事実を知らない人の人生は、かなり異なる人生を送ることになるということです。私たちが、イエスが救い主だけでなく、さばき主でもあるという事実を直視しなかったため、現代のキリスト教は不注意さずさんな部分があります。「神は世界を義によってさばく日を決めておられます。」さばきの目的は何ですか。それは義であって、私たちがどのように生きているか、どのような人であるかということです。それは教派や国籍、社会的地位などとは関係ありません。さばきが唯一、論点としているものは義です。ヨハネの第一の手紙で、ヨハネは、不正はみな罪であると言っています。それは、曲がったことが何であるかを知りたいということに似ています。私は、幾何学者ではありませんが、直線を示してその線から逸脱する者はすべて曲がっているというようなものです。それは1度だけ、またあるいは90度それているかもしれません。しかし、すべてそれているのです、そしてすべての不正は罪です。義でないものは、すべて罪深いのです。それ以外のものはありません。

私は多くの信者を観察してきましたが、彼らはそのどちらにも当てはまらない第三のカテゴリーです。義でもなく、罪深くもありません。そのカテゴリーは神の考えの中には存在しません。義でないものはすべて罪深いのです。

そして、使徒の働き20章でパウロの全ミニストリーでも最も素晴らしい結果を見た、エペソでの彼のミニストリーの記述を見ていきましょう。パウロはそこを立ち去るということで、エペソの教会の長老たちにこう語っています。「もう二度と私の顔を見ることのないでしょう。」パウロは、彼らに対するこの愛と思いやりのメッセージをしたのです。20-21節でパウロはエペソでの自分のミニストリーについてこう語っています。

「益になることは、少しもためらわず・・・」

私は、「少しもためらわず」というこのフレーズを深く考えることがよくあります。それは、自分の社会的地位を脅かすため、すべての真理を語らないという動機があるかもしれないということを暗示しています。もし、あなたがある教団の牧会者であるなら、教団内でのあなたの立場が危くなるかもしれません。もし、あなたが社会で有名であるなら、その評判に影響を及ぼすかもしれません。ですから、パウロは「私は良く考えた結果、私にメッセージを語ることをためらわせるものは何もないと決心したのです。」と言ったのです。

「益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え…」

そのように、パウロのメッセージは群衆の前でも、家の集まりでも変わることがありませんでした。同じメッセージでした。そのメッセージとは何だったのでしょうか。

「ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです。」

最初は何が来ますか。信仰ですか、それとも悔い改めですか。悔い改めです。神に対する悔い改めです。「神さま、赦してください。私は罪人でした。自分で自分の人生を導いてきました。」そして、イエスに対する信仰です。「イエス、私はあなたが私の身代わりとなってくださったことを信じます。あなたが十字架で私のために死んで私の罪を取り去ってくださいました。」しかし、あなたは、まず神に対する真の悔い改めがない限り、イエスにある真の信仰を持つことはできません。

そのように、新約聖書は一貫しています。私たちはあまりにもメッセージの質を下げがちで、人々をある意味だまし、本当のクリスチャンになるという意味において間違った印象を与えていることを、教会は悔い改める必要があると思います。悔い改めなしに本当のクリスチャンになることはできません。悔い改めのない信仰はありません。

聖書は、どこであっても、すべての人が悔い改めなければならないと言っています。なぜあらゆる場所のすべての人なのかと思うでしょう。イザヤ 53:6 にある預言者イザヤからお答えしましょう。

「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。」

お分かりのように、それが私たちの問題なのです。私たちは、殺人や偶像礼拝に関わったり、何かを盗んだり、嘘をついたりしていなくても、すべての人がある一つのことをしてきました。自分勝手な道を行ったのです。私たちの道は神の道ではありません。私たちの教団や人種的背景にかかわらず、すべての人にある一つの事です。肌の色が何色であれ、私たちはみな、自分勝手な道に向かって行きました。

「しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」

咎という単語は、非常に強い言葉です。自分勝手な道とは何でしょうか。それは、咎であり、反抗であり、神の先を自分が行くことです。それこそが、神がすべての人に悔い改めを求めている理由です。私たちはみな、自分勝手な道を行ったからです。私たちは自分のことをし、自分を喜ばせることをし、神を追いやってきました。神は言われます。「私はあなたを受け入れる。あなたが悔い改めるなら、イエスのゆえにあなたを赦そう。」悔い改め、それが重要なのです。

さて、あなたにお伝えしたいことは、悔い改めは神から始まるということです。すべての良いものは神から始まります。私たちは常に神の恵みによっています。神の恵みを離れては、神の霊の動きを離れては、私たちは悔い改めることができません。このことは、詩篇 80 篇で非常にはっきりと書かれています。この詩篇に同じ語句が 3回出てきます。3節でこう言われています。

「神よ。私たちをもとに戻し、御顔を照り輝かせてください。そうすれば、私たちは救われます。」

「もとに戻す」とは、言い換えれば、悔い改めるです。

7 節では、「私たちをもとに戻し、御顔を照り輝かせてください。そうすれば、私たちは救われます。」

19 節、「万軍の神、主よ。私たちをもとに戻し、御顔を照り輝かせてください。そうすれば、私たちは救われます。」

お分かりでしょうか。神があなたをもとに戻してくださらない限り、悔い改めることはできません。それは、神から始まります。それこそが、神が私たちをもとに戻され始めるときに、どれほど私たちの人生にいのちがあふれる瞬間となるかという理由です。なぜなら、神がもとに戻してくださることを無視して背を向けるなら、私たちは悔い改めることができないままにいるからです。私たちは悔い改めを始めるために、神にゆだねます。

そして、哀歌の 5 章 21 節を見ましょう。哀歌は、神に反抗し続けるエルサレムの荒廃についてのエレミヤの嘆きです。5 章 21 節に「みもとに帰らせてください。」とあります。これは詩篇 80 篇と同じことばです。

「主よ。あなたのみもとに帰らせてください。私たちは帰りたいのです。私たちの日を昔のように新しくしてください。」

あるいは、帰るです。みもとに帰らせてくだされば、私たちは帰ります。これは、非常に厳粛な考えです。私たちは、神があなたを帰らせ始めなければ、あなたは帰ることができません。ですから、すべての人の人生にとって非常に敏感な瞬間なのです。

軍隊の仲間であった一人の若者のことです。彼は、私が救われた時の唯一の証人です。彼は私の人生の変化を見ました。そして、のちに同じ部隊で私はバイブル・クラスを始めました。私は何かをしなればと思ったのです。どのようにバイブル・クラスを持てばいいのか、どこから始めたらいいのかもわかりませんでした。新約聖書から始めようと考えました。どこからでしょう。マタイ 1 章です。ですから、私はイエスの系図から始めたのです。4、5 人の兵士がいっしょに学んでいました。それは、北アフリカの砂漠でのことでした。そして、その彼-彼とは本当に親しくしていました-彼が私に言ったのです。「なあ、申し訳ないけど、もう君の聖書の学びには参加しないよ。」私は理由を尋ねました。彼は、「だって、学んだら、僕は回心するとわかっているから。」と言ったのです。何年も経って、私が彼に会ったとき、彼の状況は全く変わっていました。彼は私の知っている中でも最も悲惨な人になっていたのです。彼は私に助けを求めました。私はできる限りのことをしました。私はこれまで人々を主に導いて

きましたが、私には彼を助けることはできませんでした。彼の妻を手助けし、彼女は救われました。私は彼が結局どうなったのかわかりませんが、何という私に対する警告でしょうか。あなたは、自分が帰りたいと思ったら、帰ることができると思っているでしょう。「神、今は忙しいから、またあとで戻ってきます。」と言うかもしれません。しかし、それはできないのです。彼が戻りたいと思ったときに、彼は帰ることができなかったのです。彼が悔い改めのチャンスを失ったと言っているのではありません。私は、彼がどうなってしまったのかわかりません。しかし、それは私への教訓でした。神が彼に救いを受け取るようにと語られていたとき、彼にとっては都合のいい時ではありませんでした。彼が救いを得たいと思ったとき、神は彼に語ってくれませんでした。彼がどうなってしまったのかを知っている人はいません。

さて、聖書は悔い改めと二者択一のものがあると言っており、ルカ13章に書かれています。イエスのミニストリーの最初の数節です。

「ちょうどそのとき、ある人たちがやって来て、イエスに報告した。ピラトがガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちのささげるいけにえに混ぜたというのである。」

明らかに、ピラトはガリラヤ人がいけにえをささげている間に、処刑をしたようです。あなたは、彼らは良い人に数えられると考えるでしょうが、イエスは答えてこう言われています。

「イエスは彼らに答えて言われた。『そのガリラヤ人たちがそのような災難を受けたから、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったとも思うのですか。そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。また、シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだったとも思うのですか。そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。』」

悔い改めか滅び、2つのうちどちらかです。それは、イエスご自身のことばです。悔い改めは、信仰への道だとお話ししました。信仰の性質について少し考えてから、次のテーマに移りましょう。前にも言いましたが、ローマ10:17で「信仰は聞くことから始まり、聞くことはキリストについてのみことばによる」と言っています。これは、とても重要な教理です。聖書で用いられている信仰とは、常に、神のことばにある信仰という意味です。信仰はただ一つの源からだけ来るのであって、神のことばです。神のことばという唯一のフォーカスです。現代のことばで言うなら、私は主治医を信じている。あるいは、あの政党を信じている、または特定の薬、ダイエット法を信じているという感じです。それは正しく、そのような言葉を使うことは間違っていないかもしれませんが、聖書の言うところの信仰ではありません。聖書の中の信仰とは、常に神のことばが基礎です。神のことばに根差していないものはすべて、聖書的な信仰ではありません。

そして、ヘブル11章で信仰の定義を見ることができます。聖書の中で唯一定義している箇所だと思います。聖書で実際に定義している他の場所はないと思います。ヘブル11:1です。

「信仰は望んでいる事からを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」

ですから、信仰と希望には関連性があります。信仰があると考えているとき、多くの人々は希望があるということ私を私が発見しました。信仰は今ここにあるもので、希望は将来のためのものです。信仰とは本質で、現実的なもので、実体とも呼ばれます。それは私たちの心の中にあるものです。信仰の土台の上に、私たちは正当な将来への希望を持つことができるのです。しかし、正しい信仰に基づいていない希望は、単に願望に過ぎません。しかし、忘れないでください。信仰は、私たちの心の実体です。それはまさにその場所に、まさに今あるのです。

ローマ10:9は言っています。

「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。」

聖書的な信仰とは、思いの中にあるのではなく、心にあるのです。パウロはこう続けています。

「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」

新約聖書で、信じるとは、動作の単語です。停止しているものではありません。知性でもありません。あなたの心を新しい何かに導くものです。信仰とは、動詞です。信仰によって私たちは救われると信じるのです。あなたは知的な信仰を持つことができますが、それによって変えられることは決してありません。あなたは知的側面から聖書のあらゆる教理を悟り、まったく同じ状態にとどまることがあり得るのです。しかし、あなたが心に信仰を持つとき、救いに導かれるのです。

信仰は現在のもので、希望は将来のもので、信仰は心の中にあり、希望は思いの中にあります。第一テサロニケ 5:8 でパウロはその両方について、とても興味深いたとえを用いて語っています。

「しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶるとしてかぶって、慎み深くしていきましょう。」

2つの武具があります。信仰は胸当てです。胸当ては何を守りますか。そうです、心です。しかし、希望はかぶとです。かぶとが守るものは何ですか。そう、頭です。信仰は心の中に、希望は思いの中にあります。

すべての真のクリスチャンは楽観主義者であるべきなので、希望はとても重要です。もし、あなたが悲観主義者であるなら、あなたの信仰を否定することになります、私は、希望をこのように定義します。良い神のこぼの土台にある自信に満ちた期待。そして、真の信者である私たちひとり一人が素晴らしい自信に満ちた期待を持っています。なぜなら、この人生に何が起ころうとも、私たちはイエスと永遠にすることができるのです。もし、それがあなたの希望なら、あなたは落胆しても、がっかりしても、あきらめません。なぜなら、あなたには信仰に基づく希望があるからです。

では、ヘブル 11 章に戻ってもう少し信仰について見ていきましょう。素晴らしい偉大な信仰の章とも言える 11 章です。3 節でこう言っています。

「信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。」

信仰は、見えないものとあなたをつなぐということを理解することは重要です。信仰は見えるものによるものではありません。信仰は、感覚的な領域を超えて、見えない領域の中に私たちを導きます。

パウロは第二コリント 5:7 で言っています。

「確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。」

これは現在形です。私たちが見るとき、信じる必要はありません。見えないときにこそ、信じる必要があるのです。ですから、パウロは、私たちは信仰によって歩んでいると言っているのです。私たちは見える者によって歩んでいるのではなく、信じることによって歩んでいるのです。

ラザロの墓の外でイエスはマルタに言いました。

「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」(ヨハネ 11:40)

何が先に来ていますか。信じること、それとも、見ることですか。そう、信じることです。多くの人は言います。「私は見たら信じます。」それは真実ではありません、なぜなら、あなたは見たら、知る必要がないからです。見えないときに信じる必要があるのです。私たちは、見えるものによってではなく、信仰によって歩むのです。多くの人は言います。「あー、見ることができていたら信じていたのに。」それは真実ではありません。信じる必要はなかったのです。見えないときに信じる必要があるのです。もう一度言いますが、私たちは、見えるものによってではなく、信仰によって歩むのです。

私は原文のギリシャ語とヘブル語でもお伝えしたいのです、信仰は第一の教理ではなく、特徴です。私たちの福音的考え方においてそれを間違っているとらえています。私たちは特定の教理の知的領域として信仰について語る傾向があります。しかし、まず信仰とは、特徴です。これは、ヘブル語の単語の発音では *emanau*、ギリシャ語では *pistos* と言います。どちらも、忠実、誠実、献身というのが第一の意味です。

イエスは、弟子たちに、「けれども、あなたがたこそ、わたしのさまざまな試練の時にも、わたしについて来てくれた人たちです。」と言いました。これが信仰です。イエスについて行くことです。それは、個人的な献身です。

信仰は、私たちがそれを告白する時、私たちの大祭司であるイエスと私たちをつなぎます。ヘブル 3:1 にこうあります。

「私たちの告白する信仰の使徒であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい。」

それを忘れないでください。とても、とても重要なことです。イエスはあなたの告白する大祭司なのです。もしあなたがそのように言うなら、イエスはあなたの大祭司です。もしあなたが黙るなら、イエスは私たちの大祭司となることができません。それが、なぜ信仰を告白することが、重要かという理由です。

そしてヘブル 4:14 にこうあります。

「さて、私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。」

私たちは告白し、試され、しかし固く保つのです。私たちが堅く保っている限り、イエスは私たちの大祭司です。

しかし、ヘブル10章では、さらに次の段階に私たちを導きます。ヘブル 10:21、そして 23 節です。

「私たちには、神の家をつかさどる、この偉大な祭司があります。…私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。」

私たちは信仰から希望へと前進している、ということに注目してください。私たちは信仰に基づく希望があります。信仰を告白し、今、希望を告白するのです。動揺しないで、とあります。なぜそのように言っているのでしょうか。なぜ、私たちの信仰の告白を堅く保つようにと言っているのでしょうか。なぜなら、私たちに反対する力、圧力をかける力、私たちを失望させ、私たちの信仰を弱くしようとさせる力が多くあるからです。これは決意の戦いです。忍耐の戦いです。

最後に、言いにくいことですが、信仰は試されるということをお伝えしなければなりません。試されることのない信仰は、神の目に価値のないものです。イエスはラオデキヤの教会に言われました。

「わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精錬された金をわたしから買いなさい。」

それこそが試練に立つ本物の信仰です。古代、火で精錬されない金は、価値がないとみなされました。試練のない信仰は、神には全く価値のないものです。

最後に、ヤコブ 1:2-4 を紹介しましょう。

「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」

あなたは、何一つ欠けたところのない、完全な者になりたいと願いますか。あなたは忍耐を完全に働かせなければなりません。それはあなたが通る試練です。ペテロは別の箇所でこう言っています。

「…いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならないのですが、あなたがたの信仰の試練は、火で精錬されつつなお朽ちて行く金よりも尊く、イエス・キリストの現れのとくに称賛と光栄と栄誉になることがわかります。」(I ペテロ 1:6-7)

あなたが、私にそう言わないように願っているかもしれない言葉を最後に言わせてください。忍耐を学ぶ唯一の方法があります。何だと思えますか。そう、耐え忍ぶことです。

神の祝福をお祈りします。